



13.5%

日本人の出国率^(※)

2018年「観光白書」(観光庁)

10連休を取れた人にはまさしく「ゴールデン」となった今年のゴールデンウィーク。テレビニュースでは海外に向かう人々でごった返す空港の様子が映し出されていた。「こんなにたくさんの人が海外に行っているのか…」と自宅で過ごす自分を不憫に思っていたら、そうでもないらしい。日本人の出国率13.5%は、他国に比べかなり低いのだ。

他国の状況とはいえば、ドイツ102.5%、イタリア94.5%、イギリス92.0%、カナダ86.2%、アメリカ55.4%、フランス45.9%、韓国43.7%、オーストラリア41.3%、スペイン33.8%。こうして見ると、日本は圧倒的に出国率が低い。理由はいろいろあるだろう。隣国と陸続きでないため、空路や海路によらなければならず、その旅行は労力も費用も負担が大きい。海も山もあり四季の変化に富んでいるから、国内だけでも十分楽しめる。長期休暇が取りにくい。取れても全国一斉に休暇となるため、ツアー料金は高く、予約も取りにくい。娯楽の種類が増え、若年層にとって海外旅行が魅力的に感じられない等々。

海外旅行がもたらす効果は、リフレッシュだけではない。海外の「今」を直接見聞する機会ともなる。その昔、海外に行ける人は限られていた。森鷗外しかり、夏目漱石しかり、他国を自分の目で見て、触れることで、多くのことを学んだ。

インターネットが普及した現代は、日本に居ながら世界中とつながれる。しかし、現地に行かなければわからないことは多い。現地の風に吹かれて初めて気づけることもある。グローバル化が進展する中、出国率の低さが将来にどう影響するのか気になる。

(※) 出国率は、1年間の海外渡航者の延べ人数÷人口

1.3回

1人当たりの国内旅行年間回数

2018年「旅行・観光消費動向調査」(観光庁)

「一生に一度くれえは、お伊勢参りに行ってみてえもんだねえ〜」「何言ってるんだい。隣の家まで行くのも面倒がってるのに」。そんな会話が合ったかどうかはわからないが、「お伊勢参り」は江戸時代の庶民の憧れだった。憧れとまではいかずとも、お伊勢参りは今も人気のようで、改元のあった今年のゴールデンウィーク期間中、参拝者は例年の2倍以上に上った。

庶民の旅の始まりは熊野詣など、信仰のための参拝だったという。主な移動手段が徒歩だった時代、旅には数週間、時には1カ月以上を要した。旅というものは特別で、「一生に一度くらい」の夢さえ叶えられなかった庶民が大半を占めていただろう。

翻って現代はどうか。2018年の国民1人当たりの宿泊を伴う観光・レクリエーションを目的とした国内旅行の旅行回数は年間1.3回で、宿泊数は1.6泊、旅行単価^(※)は60,645円となっている。夏休みなどに年1回程度、6万円かけて1〜2泊の旅行をするのが、現代の国内の旅の平均的な姿のようだ。

これはあくまでも全国平均であって、地域別では若干状況が異なる。旅行回数が最も多いのは北陸信越と関東の1.4回。逆に最も少ないのは沖縄の0.7回で、年1回にも満たない。新幹線や車で他の都道府県へ移動できる本州などと違って、沖縄では飛行機や船での移動が必要なためだろう。その分、宿泊数は2.0泊、旅行単価は63,923円と全国平均より多い。同じ傾向は九州にも見て取れる。

江戸時代、五街道や宿場が整備されたことで、庶民も旅がしやすくなった。今後、インフラの整備が進めば、地域による差も小さくなっていくかもしれない。

(※) 旅行単価には、参加費、交通費、宿泊費、飲食費、買物代、その他が含まれる

(執筆/ライター 更田 沙良)